

研究ノート

「中間派の急進主義」と「中間身分のパニック」

——ナチズムの「中間層テーゼ」の再検討

雨 宮 昭 彦

I はじめに

本稿は、ナチズムの社会的基盤に関する所謂「中間層テーゼ」の2つの古典的文献、S.M. リプセット (Seymour M. Lipset) とT. ガイガー (Theodor Geiger) の議論を取り上げ、その比較・検討を試みようとするものである。

ナチズムの選挙民に関するこの「中間層テーゼ」は、最近では、J. ファルター (Jürgen Falter) らの選挙統計学的な実証研究によってその有効性に疑問符が投げかけられている¹⁾。そしてこれに対して、かつてH.A.

-
- 1) ファルターらの研究成果の簡潔な要約として、Falter, Wahlen und Wählerverhalten unter besonderer Berücksichtigung des Aufstiegs der NSDAP nach 1928, in: K.D. Bracher u.a. (Hg.), *Die Weimarer Republik 1918-1933*, Düsseldorf 1987. より詳細な分析として、Ders. u. D. Hänisch, Die Anfälligkeit von Arbeitern gegenüber der NSDAP bei den Reichstagswahlen 1928-1933, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. 26, 1986. ファルターらの選挙統計学的研究のプロジェクトとその経過については、次のような長い、刺激的なタイトルをもった論考を参照、Falter, Arbeiter haben erheblich häufiger, Angestellte dagegen sehr viel seltener NSDAP gewählt als wir lange Zeit angenommen haben. Ein Rückblick auf das Projekt "Die Wähler der NSDAP 1928-1933", in: *Geschichte und Gesellschaft*, 16. Jg., Heft 4, 1990. 関連する邦語文献として、黒川康「ナチ台頭とドイツ」『法政史学』第43号, 1991年。

ヴィンクラー (Heinrich A. Winkler) らによって提起された「ナチス＝国民政党史論」²⁾、このような実証研究によって確かな支柱を得つつあるものと受け止められている³⁾。

本稿では、このような今日の論争を念頭におきつつも、課題をあくまでも「中間層テーゼ」の再検討に限定し、ファルターらの「国民政党史論」を吟味するための方法的視角を準備することをめざしている。より具体

-
- 2) H. A. Winkler, *Mittelstandsbewegung oder Volkspartei? Zur sozialen Basis der NSDAP*, in: W. Schieder (Hg.), *Faschismus als soziale Bewegung*, (1. Aufl., 1976), 2. Aufl., Göttingen 1983. ヴィンクラー, 山口・坪郷訳「復古の幻想」『思想』639号, 1977年。また, G. Pridham, *Hitler's Rise to Power*, London 1973, p. 222. (プリダム, 垂水・豊永訳『ヒトラー 権力への道』時事通信社, 1975年, 254頁) ここに「国民政党史 (Volkspartei) とは, その綱領や党員の社会構成やその政策において特定の社会集団の利害にではなく, 国民全階層のそれに指向するような, 現代西欧の議会制民主主義社会における一般的な政党の形態であり, それは, 特定のイデオロギーや社会層に指向したかつての「世界観政党」(Weltanschauungspartei) や「階級政党」(Klassenpartei) と区別される。国民諸階層の統合能力を有する大規模な, かつ政治的にはリベラルで民主的な国民政党史の形成は, 社会の高度な政治的安定に本質的に貢献するものと考えられている。A. Mintzel, *Die Volkspartei. Typus und Wirklichkeit*, Opladen 1984; Ders., *Der akzeptierte Parteistaat*, in: M. Broszat (Hg.), *Zäsuren nach 1945*, München 1990, S. 79ff. この「国民政党史」化は戦間期以降の「階級構造の弱体化」と密接に関連するが, これについては, 次の示唆に富む指摘を参照。J. Kocka, *Klassenstandpunkt und allgemeines Wohl wurden auf einen Nenner gebracht*, in: S. Miller u.a. (Hg.), *Gesellschaftlicher Wandel — Soziale Demokratie. 125 Jahre SPD*, Köln 1988, S. 46f. 戦間期における一方での反独占的中小資本家層の抬頭と他方でのプロレタリアートの分化・「ブルジョワ化」による「階級構造の弱体化」の認識は, ナチズムの「中間層テーゼ」に関わる当該期の諸議論 (Geiger, Eschmann, Lederer, Briefsらのそれ) の共通の核心的な問題関心をなしていたものと考えられる。この点については, 別稿での検討を予定している。
- 3) F. Lenger, *Mittelstand und Nationalsozialismus*, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd. 29, 1989; M. Prinz, *Wandel durch Beharrung*, in: *Ibid.*; M. König, *Die Angestellten unterwegs*, Köln 1991, S. 69f.

的に言うと、以下の作業の目的は、「中間層テーゼ」の2類型を検出し、その比較検討を通してガイガーの中間身分論のメリットを極立たせ、それによって「中間層テーゼ」をその硬直的な理解から救い出すことにある。ガイガーの古典的論文は、その重要性⁴⁾にも拘らず、これまで必ずしも正確に読まれてきたとはいえない、と筆者は考えている⁵⁾。

II 「中間派の急進主義」——S.M. リプセット

「中間層テーゼ」を最も古典的に定式化したと目されているリプセットの研究『政治的人間』によれば、「古典的ファシスト運動は中間派の急進主義を代表している」とされ、「ヒットラーに率いられた国家社会主義労働党」は「革命的なファシスト政党の古典的な実例」として位置づけられている⁶⁾。

ここに「中間派」とは、表1が示すように、フランス革命とロシア革命以降の近代民主主義社会における3つの類型的な政治的立場のうちの

4) 例えば、現代ドイツの若手社会史家の一人レンガーは、ナチズムの社会的基盤に関する同時代人の観察のうち、「今日、疑いなく、最も良く知られているのは、テオドーア・ガイガーのそれである」と述べている。Lenger, *a.a.O.*, S. 176. ガイガーの論考は、1845年からナチス期までのドイツ中間層の生活状態と政治的態度に関する古典的な文献や資料を集めた次の重要なアンソロジーにも、その主要部分が収録され高く評価されている。H.-G. Haupt (Hg.), *Die radikale Mitte. Lebensweise und Politik von Handwerkern und Kleinhändlern in Deutschland seit 1848*, München 1985, S. 235ff. 本稿が企図するガイガー再評価の観点からみても、編者ハウプトが行なった抜粋は適切なものであると考えられる。

5) 一例として、本稿、註12を参照。

6) S.M. Lipset, *Political Man. The Social Bases of Politics*, (1st ed. 1960), expanded Edition, Baltimore, Maryland 1981, p. 129, 138. (リプセット, 内山訳『政治のなかの人間』東京創元新社, 1963年, 118, 124頁)

表1 リブセット「中間層テーゼ」の理念型

政治的立場	左翼	中間派	右翼
通常のイデオロギー	社会主義	自由主義	保守主義
政治的急進主義	共産主義など	ファシズム	伝統的権威主義
社会的基盤	労働者階級 肉体労働者， 地方の貧困階 層	中間階級 小企業者，ホ ワイトカラー 労働者，自由 業者の中の反 宗教的な人々	上層階級 大企業や農園 の所有者，管 理職階層，自 由業者層，教 会に属してい る人々など

ひとつである。

この「中間派」の政治的立場は、小企業家やホワイトカラー労働者を中心とする「中間階級」の中にその社会的支持基盤をもち、民主主義社会におけるその通常のイデオロギーは、自由主義であるとされている。その場合「自由主義的立場」とは次のように定義されている。①経済においては、自由放任イデオロギーの信奉、小企業の存続の信念、強力な労働組合への反対、②政治においては、最少限の政府の干渉と規制への要請、③社会的イデオロギーにおいては、平等な業績達成の機会の支持、貴族制への反対、強制的な所得の平等化の反対、④文化においては、反教権主義と反伝統主義。近代民主主義社会の「中間派」は、イデオロギー的には通常このような自由主義を特徴とし、それは中間階級に社会的基盤をもつ。このような「中間派」の政治的に急進的な運動形態こそが、リブセットによれば、古典的なファシスト運動に他ならないのである。ヒットラーのナチズム運動は、このような本来は自由主義的な中間階級の19世紀末以来の「絶望的反動」（ラスウェル）の延長線上に位置してい

るとされる。

大規模な権力に対して個人的権利を擁護しようとする中間階級の「自由主義のイデオロギー」は、20世紀の「高度な産業社会」におけるこの階級の相対的下落とともに、かつて封建制を解体せしめ産業資本主義制度の発展を促した革命的階級のイデオロギーから反動的階級のそれへと転化した。リブセットは、パーソンズの考察を援用しつつ、次のように述べている。かつての「自由主義のイデオロギー」は、19世紀末以降のそれを支える諸階層の危機の中で、「『資本主義』というシンボル」に対する否定へと、「社会の合理化という『イデオロギー』に対する反動」へと転化する。このような否定や反動が「少なくともファシズムの中心的な局面である」⁷⁾、と。

以上のようなリブセットの「中間層テーゼ」は、ファシズム抬頭期当時の社会学者の観察やその後のS.A. プラットやR. ヘーベルレらの選

7) *a.a.O.*, p. 133. (邦訳, 121頁)

8) T. Geiger, Panik im Mittelstand, in: *Die Arbeit. Zeitschrift für Gewerkschaftspolitik und Wirtschaftskunde*, 7. Jg., Heft 10, Berlin Oktober 1930. ガイガー (1891~1952) は、ミュンヘン生まれの社会学者で、当時ブラウンシュバイク工科大学教授 (1928年から33年まで)。1922年から29年まではベルリンの労働者大学 (Berliner Arbeiterhochschule) の校長をもつとめた。1933年ナチス政権の成立とともにデンマークに亡命し、1938年よりアーフス大学教授。社会民主党との関係では、1918年に入党し、32年12月離党。同党に所属していた間にも、同党にとっては「疑わしいアウトサイダー」であったとされている (引用は、八林、後掲論文, 74頁)。ここに取り上げる論文は、左派系の自由労働組合のナショナルセンター「ドイツ労働総同盟」(ADGB) の機関誌『労働』(Die Arbeit) 誌上に発表された。ガイガーの階級論の変遷については次を参照。八林秀一「ドイツ中産層の歴史的把握をめぐって」『専修経済学論集』(専修大) 第13巻, 第2号, 1979年。なお、ガイガー論文について本稿とは異なった解釈をとる文献として、鎗田英三『ドイツ手工業者とナチズム』九州大学出版会, 1990年, 185頁以下を参照。ワイマール期の「旧中間身分」(alter Mittelstand) の小資本家的な経済の実態とその反独占的動向については、柳沢治『ドイツ中小ブルジョワジーの史的分析』岩波書店, 1989年, を参照。

挙統計分析——その有効性は最近のファルターらの研究によって著しく限定されるに至ったが——に基づいて構築されたものであり、最近に至るまで広汎な支持を見い出してきた。ところで、このようなリブセットの理念型の系列に明らかに属するものとみなされ、引用が重ねられてきた当時の文献のひとつとして、T. ガイガーが1930年に公けにした「中間身分のパニック」がある⁸⁾。以下ではこの古典的文献を取り上げ、それを詳細に分析・紹介し (III)、それとリブセットのテーゼとの比較検討を試みてみたい (IV)。

III 「中間身分のパニック」——T. ガイガー

1 「中間身分」とその2類型

ガイガーは、はじめに、資本主義社会における資本家とプロレタリアートとの間の「中間階層」(Zwischenschicht)の存在を確認している。彼によれば、職業身分的に階層化された社会から生産手段の独占化に基づく階級社会への転換と共に、根本的な階層の編成替が行なわれる。しかし、そのような階層構造化の基礎原理の「職業身分」から「階級」への転換にも拘らず、両階級(生産手段の大所有者と依存的賃労働者)の間に「一定の小さくない人口のブロック」が存続する。それが「中間階層」である。

この「中間階層」には、①その客観的事実に基づいて、即ちささやかな生産手段を所有することによって、なお明白なプロレタリアの階級状態にはない人々(手工業者、小売業者、農民)、及び、特別な職業的資格や高い収入によってプロレタリアの階級状態が「隠され」ている人々(官吏、自由業者)、そして、②客観的にはプロレタリアートの階級状態にありつつも、イデオロギー的理由からプロレタリア階級との連帯に抵抗し

ている人々（多くの農業労働者と職員）とが存在する。これら諸集団には共通した生活状態や生活様式は存在しないが、階級としての連帯・結合を拒否するという点で、従って階級原理の貫徹に抗するという点でひとつの社会的領域^{ゾーン}を形成している。この人々の総体を、ガイガーは、「中間身分」^{ミッテルシュタント}（Mittelstand）と名づける。それには、19・20世紀交以来、「旧中間身分」^{アルター・ミッテルシュタント}（農民層、手工業者、小売業者）と、「新中間身分」^{ノイヤー・ミッテルシュタント}（職員、「異論がなくもないが」官吏と自由業者と上層労働者）とが存在する。

中間身分は、1925年の職業調査によれば、本来の就業者（統計用語はErwerbstätige）のみについてみると1145.9万人を数え（旧中間身分＝651.7万、新中間身分＝494.2万）、それにその家政に属する人々やそこから賃金を支払われる家事手伝いをも加えると（その総体を示す統計用語はBerufszugehörige）、2350.2万人（旧中間身分＝1357万人、新中間身分＝993.2万人）にも達し、「総就業人口（Erwerbstätige）と総就業者世帯構成人口（Berufszugehörige）の各36%、総人口の1/3以上を占め」、「恐ろしく大きなブロック」を形成していた。

このような旧新両中間身分は、両者共に、階級的連係（資本家或いはプロレタリアートとの結びつき）を拒否しているが、その根拠は異なる。前者の拒否には客観的根拠が存在するが、後者のそれは専らイデオロギー的理由によるものである。

2 旧中間身分

まず前者、旧中間身分は、近代階級社会以前の時代に職業身分的・所有身分的に構造化された人口の複合体であり、今日の「晚期資本主義」（Spätkapitalismus）によって、一部は資本主義的生産方法に適応しつつも、多くはその存在を、様々な程度に、威嚇されている。彼等はその

ゲジメンク
心性において「初期資本主義」(Frühkapitalismus)の時代の社会形態と結びついており、その客観的階級状態からみて「小資本家的」(klein-kapitalistisch)である。この人々のもつイデオロギーは、かつて存在していたその現実的基盤を今日では失ない、その意味で典型的に「時代不適合な」(Zeit-inadäquat, 以下「時代遅れの」と訳す)イデオロギーとなった。手工業の伝統を棄て産業資本主義の様式に順応した個人企業家(10人以上の職人を擁した有力な手工業者や小工業者)は、小売業者と共に、そのイデオロギーの源泉を、「自由主義的な経済的個人主義」(liberaler Wirtschaftsindividualismus)の時代に有している。彼等は、資本主義に最も巧みに適応した場合にも、かつて彼等有していた経済的・社会的意義は著しく損なわれているのである。かつての「勤勉」(Gewerbefleiss)の代表者は、今日、「工業のまわりをまわる、尊敬すべきではあるがつつましい衛星」となった。コンツェルンや百貨店などの晩期資本主義の非人格的な巨大組織によって圧迫されたこの階層は、「個人的資本主義」(individueller Kapitalismus)から晩期資本主義への展開、経済的個人資本主義から「経済的集団主義」(ökonomischer Kollektivismus)への転換に恨みを抱く「時代に合わない人々」(Unzeitgemäßen)である。そのイデオロギーの時代不適合性、彼等の失意は、選挙の度毎にその投票政党を変えるという著しく動揺した政治的態度の中に反映しているのである。

3 新中間身分

他方、新中間身分は、旧中間身分と異なって、晩期資本主義の経済的構造変化によって初めて成立した階層であり、近代的階級社会にその存立基盤を有している。この発生してからまだ日の浅い階層は、解体過程にある古い職業諸身分(手工業者や商人)から遊離した人々や最近では

農民層・労働者層出身の多くの婦人，また退役将校，そして職員職（工場親方）へと上昇した労働者などから成り，その社会的出自の多様性の故に職員独自の生活様式や自立した階層的自己認識をもたない。

「自由に浮動する知的な中間身分」（マンハイム）とか「官僚制的に構成された来たるべき社会において指導的役割を果たす階層」（シュンペーター）というような規定や予測は，この階層全体の把握として適切ではない，とガイガーはみる。客観的状态からみて，この新中間身分は，旧中間身分とは異なって，明白にプロレタリア的である。しかし彼等の大部分は，そこから主体的帰結を引き出すことには全力をもって抵抗している。彼等のイデオロギーは，たとえ同時代の他階層の社会的経済的状态からは理解可能であるにしても，彼等自身の客観的な社会経済的状态の中には現実的な土台をもっていない，その意味で「場所不適合の」（Standort-inadäquat，以下「場違いの」と訳す）イデオロギーである。近年では職員層の間に生活のプロレタリア的な不安定性が明白となるにつれて，左派の自由労働組合に組織された職員の数が増加してきているが，他方で，職員の非常に多くは彼等の客観的経済状態のイデオロギー的帰結に対して反発している。

このようなイデオロギー的な分裂や「場違いのイデオロギー」の発生背景には，職員層の状態の多様性が存在している。下級事務職員，店員，技術者，工場親方のメンタリティーは必然的に異なっている。また彼等の俸給は，賃率からみると不熟練労働者の賃金と中級官吏の俸給の間に揺れ動いており，要求される職業資格もゼロから高度な専門的能力に至るまで様々な段階がある。また，右翼職員団体DHVの言い方によれば「かつての自営への上昇に代って，今日では，職場における独自の価値をもった高い地位への上昇」の可能性によって，プロレタリアートとの身分的な違いを実態を越えて強調するような傾向もある。更に，250万の事務職員のうち100万以上を占める女子職員の場合，若年者にあっては

結婚に伴い退職する者が、また既婚者にあつては家計補助のための副業労働として職に就いている者が多いために、近代的労働者のイデオロギーを形成するための場所そのものが根本的に欠落しているのである。また、この20年間に倍増した職員層の社会的出自（旧中間身分からの出身）や職業的・教養的出自（退役将校や教養身分からのデクラッセ）は、自分の出身階層やかつて占めていた社会的地位に属する心性をこの階層に持ち込むことによって、また労働者層から「上昇」した子弟にあつては職員層の「場違いのイデオロギー」への同化を通じて、「低く評価されることへの不安」という独自の社会心理を増長させているのである。事務職員の場合には、自己の位置付けの際にイデオロギー的に上層と同一化しがちであるが、それは、事務室とペンに象徴されるその職業労働が、外面上、かつての「高学歴者の身分」とくに官僚に類似していること、中・下級官僚や公共機関における私法上の契約に基づいて採用された職員の増加が彼等と公官吏との類似性を高めていることなどによっている。

以上のように、新・旧中間身分は、いずれも、各々、「場違いの」、或いは「時代遅れのイデオロギー」が入り乱れる「イデオロギー的な混乱の温床」となっている。

4 中間身分とナチズム

このような「場違い」で或いは「時代遅れ」な、それ故に同時代のなかに首尾一貫して支持しうる強力な政治的党派を見い出すことの困難なイデオロギーをとらえたのがナチスであった。「ナチズムがその選挙における成功を新・旧中間身分に本質的に負っているということは疑いを入れない」。ある推計によれば、中間身分は1930年9月選挙でのナチスの得票の約半分を占めていた。

ナチスは、プファルツやウンターフランケンのような既にナチスが強

力に浸透している地域やニーダーバイエルンのようなナチズムの浸透を拒むカトリックの地域(中央党の地盤)を除いて、様々な就業構造をもった殆ど全ての選挙区で、約7～9倍の得票の伸びを示した。それは両中間身分からの投票に依拠して初めて可能であった。ガイガーはそのような推定の根拠を次の諸点に求めている。①いかなる経済構造の地域にも新・旧いずれかの中間身分が、一方の欠落を他方が補う形で、存在している。②ナチスのように党员(Parteistamm)数と支持する選挙人の数との較差が大きい政党は他にないが、そのことは、ナチ党の成功が未組織の浮動票に依拠しているということを示す。その政治的方向性を変え続ける両中間身分はそのような浮動票の最大の宝庫である。③全体の投票率は、前回1928年5月選挙に比べて、76%から85%に上昇したが、この9%の増加分400万票の大部分がナチスに投票したと考えられる。とすれば、ナチ党の総投票数550万票からそれを差引いた残りの150万票がブルジョワ中間派の諸政党や右翼のドイツ国民党からの移動票をなしていると考えられる。この150万という数字はそれら諸政党が前回と比べて失なった票数と一致している。

生活不安に圧迫されつつも、中間諸身分は、その内部における利害対立やイデオロギー的混乱のために、経済党を支持し続けた一部の手工業者などを別にすれば、合理的な利害政策を展開することができず、諸政党の間をさ迷った挙句、合理的な建設計画をもたないナチスの修辭的な宣伝文句(反ユダヤ主義, 反マルクス主義, 民^{ナツイオーン}族の精神的指導, 権力国家, 身分的秩序など)にとらえられるに至った。それらの不明瞭なシンボルは、合理的な利害政策に発展しえなかった中間諸身分の被害者意識を巧みにとらえたのである。

ガイガーのナチス・イデオロギーの分析において興味深いのは、それが特に特定の類型の職員と労働者の一部をも引きつけているという事実注目していることである。即ち、①ナチス第三帝国の創設計画におけ

る身分制思想は、身分主義的・民族主義的イデオロギーに染まった商業職員団体(Gedag)と御用組合に組織された労働者と共に共感を見い出している。②ナチズムは、その反資本主義的イデオロギーの故に、賃労働者の反資本主義の心性に應えるものを有している。③ナチズムの反資本主義は、とくに貨幣資本家に対する極めてプリミティブな憎悪感を表明するものであるが故に、ナチスの扇動は、職員のなかでも、とくに日頃から具体的にユダヤ人の商人や売り場主任と対峙し、彼等から不断の搾取を経験している商業職員や事務職員に迎え入れられる傾向がある。

5 議会制民主主義の「成熟」と議会主義政党の課題

1930年9月選挙におけるナチスの成功は、ドイツ人の中に、リベラルなコントロールから超越したカリスマ的・英雄的な指導者の待望や貴族主義的権威主義的性格がいかに根強いものであるかを示している。それは、議会内のもうひとつの反議会主義勢力（共産党）の大幅な伸長と共に、ドイツに民主主義がいまだなお定着するに至っていないことの証拠である。しかし他方で、ガイガーは、この選挙の画期的特徴にもふれ、それが「ドイツ人の（政治的）目覚め」を物語るものであること、そしてそれ自体は、議会主義政党の政策的対応いかんによっては、ファシズムの到来を必ずしも呼び起すとは限らないような「民主主義の成果」とあると評価している。

民主主義の成果とは、その場合、第1に、著しく多数の国民が、たとえ反民主主義政党に投票したとしても、選挙に参加したことであり、第2に、今回の選挙によって、中間身分がそれまでの消極的な中庸の姿勢を棄て、プロレタリア化の危機意識の飛躍的高まりの結果として、積極的・革命的な政治行動に出たということである。こうしてガイガーは、1930年9月選挙のなかに、国民の圧倒的多数の政治参加というドイツ議

会主義史上において画期的な事実を見出し、とくに中間諸階層の議会政治への主体的参加がその後の政治の方向に対して決定的な意義を有していることを洞察するに至った。彼は言う、「多数の有権者の投票行動とは、無言の、しかし効果的な要求に他ならない。旧中間身分は負債の軽減と生活の可能性を、新中間身分（職員層）は社会政策を求めている。これを行なわないものは、これらの票を2度目には取り逃すことになる」と。

こうしてガイガーは、彼自身が所属する「社会主義的プロレタリア的運動」、即ち社会民主主義陣営が、政治の表舞台に登場しその将来を大きく左右する位置を占めるに至った中間諸身分に対して、最大の関心を向けるべきことを説く。旧中間身分に対しては、客観的にみてその小資本家的な利害の故に、彼等の大部分を自分達の陣営に獲得することは不可能であるとしても、社会民主主義の運動は、「野蛮化した小市民層が破局的な政治をおしすすめることのないように最大の関心をもち」、「この旧中間身分の保護と建て直しのために理性的な政策を実現しなければならない」。他方、経済恐慌の打撃を受けつつある新中間身分に対しては、ガイガーは、労働者の場合と同様に、「効果的な社会政策と失業対策」を推進すべきであるとし、それが「職員と労働者の信頼を獲得するための唯一の手段である」と述べる。職員層と労働者との間の亀裂は産業の合理化の中で次第に減少し、旧中間身分をはじめとする他階層からの職員職への転換も今後一定の範囲におさえられていき、それに伴って、新中間身分のブルジョワ的・身分的な「場違いのイデオロギー」も後退していくであろう、とガイガーは予測している。

IV 比較と小括

以上の検討から明らかなように、リプセットもガイガーも、政治的中

間派（政治的右翼と左翼の中間，所有者階級の政治的立場とプロレタリア階級のそれとの中間）の存在を認め，その社会層的基盤を中間諸階層（小企業者・ホワイトカラー労働者・自由業者，旧・新中間身分）に求めている。更に，この階層が一定の社会経済的条件（高度産業社会化，晩期資本主義への転換，恐慌）の下で「急進化」（リプセット），或いは「黄金の中庸を棄てて革命化」（ガイガー）し，ファシズムの運動を支持するに至るという点において，両者の議論は「中間層テーゼ」としての基本的に共通した骨組を備えている。しかも，この中間層のもつ通常的イデオロギーの性格について，両者とも，小企業家的な自由主義（リプセット），或いは初期資本主義に特有の自由主義的な経済的個人主義（ガイガー）を指摘し，それが「20世紀の高度産業社会」の中で，或いは「晩期資本主義社会」において，「反動的な」，或いは「時代遅れのイデオロギー」へと転化するというダイナミズムを分析している点においても，両者の間には，明らかな共通性が見い出される⁹⁾。

しかし，両者の間には重大な相違もまた存在していた。まずなによりも注目すべきは，上記自由主義のイデオロギーを，リプセットが，中間派の立場一般に対応させるのに対して，ガイガーにあっては上記経済的個人主義のイデオロギーは，小資本家的な旧中間身分のそれに限定されている点である。リプセットにおける諸集団からなる中間階級は，ガイガーにおいては客観的な経済的存在形態からみて原理的に異質な2階層へと，即ち（小資本家的な）「旧中間身分」と（労働者的な）「新中間身分」へと概念的に分化されているのであり，それに対応して，両中間身

9) この点については，柳沢，前掲書，をも参照。他方，ドイツ中間層とナチズムの運動をこのように危機に陥った自由主義の反動として捉える観点を批判し，代わって，それをドイツにおける社会保守主義的・右翼的伝統から出てきたものとして把握するのが，ヴィンクラーである。Winkler, Extremismus der Mitte? in: Ders., *Liberalismus und Antiliberalismus*, Göttingen 1979, S. 205ff.

分のイデオロギーも、「時代遅れのイデオロギー」（旧中間身分）と「場違いのイデオロギー」（新中間身分）とに明確に区別されているのである。このようなガイガーの把握は、リップセットの理念型と比較して、いかなるメリットを有するであろうか。

第1に、小資本家としての客観的基盤を有する旧中間身分に比較して、経済的に労働者と共通の特質をもつ新中間身分は、その政治的態度やイデオロギーにおいて、前者以上に分化・多様化しており、客観的条件の推移（出身階層の変化や産業の合理化など）に対応して流動的・開放的性格を原理的に有していることをガイガーの理論は示唆している¹⁰⁾。それ故に、この理論は、一方では、「場違いのイデオロギー」がとりわけ濃密となる圏域に身をおき、従ってそれだけナチズムのイデオロギーに対して高い親和性を示す職員類型（商業職員層）を鋭く折出しうると共に、他方では、新中間身分と社会民主主義との結びつきの可能性についても、これを原理的に開かれた形で確保しているといえることができる。第2に、上記の点は別の角度からみれば、所謂「プロレタリア」の場合にも、条件次第では、逆に、新中間身分の「場違いのイデオロギー」の圏内に参入する可能性が原理的に存在していることをも示唆している。そのような事例として、ガイガーは、農業労働者、工場親方に上昇した労働者、御用組合に組織された労働者、プリミティブな反資本主義観を抱く労働者などをあげている。第3に、リップセットの「中間派の急進主義」論の理念型においては、危機における中間層の急進化とそのファシズム運動への転化の過程が、ややもすれば、必然的・不可避的なものであるかのように受け止められがちであるのに対して、ガイガーの場合には、新中間身分については勿論のこと（上記第2点）、旧中間身分に対しても、恐

10) リップセットも、ホワイトカラー労働者等よりも小・零細企業者のなかに、権威主義的な人々や中間階級的急進主義者がより多く存在していると指摘している。しかし、かかる現象の適切な説明が彼の理論には欠落している。Lipset, *a.a.O.*, p. 137f. (邦訳, 124頁)

慌下においても依然として手工業者と経済党との結合が維持されているという事実から、経済的パニックのなかでも旧中間身分には理性的な利害政策のもとに踏みとどまる可能性があることを読みとっていることが注目される。

ガイガーの「中間身分のパニック」論がもつ以上のようなメリットこそは、私見によれば、ナチズムの「中間層テーゼ」をその硬直的理解から救い出すための最も重要な手懸りを与えているのであり、ひいては、ファルターらによる「中間層テーゼ」批判に対して、そこから逆に有効な反批判を加える視点をも提示しているのである¹¹⁾。本来、「中間層テーゼ」は、ガイガーの鋭い観察を通じてそれが産声をあげた1930年の時点においては、本稿の分析が明らかにしたように、小資本家層、職員層の多くは勿論のこと、労働者の一部をも呑み込む可能性のある社会的・イデオロギー的なひとつの中間^{ミッテン}圏域がドイツ社会に存在していること、そこに属する人々は通常的には政治的に沈黙していたり、流動的であったり、黄金の中庸を維持しているが、一定の条件の下で一度政治的に過激化した場合には政治的転換のキャスティングボードを握りうるほどの一大勢力へと転化しうるということを説こうとするものであった。このよ

-
- 11) ファルターらが批判する「中間層テーゼ」とは、ほぼ次の2点に要約できよう。①ナチ党は、典型的な、中間層とホワイトカラー労働者の運動であり、その選挙での成功は両中間層からの得票に本質的に負っている。②ナチ党の選挙人の中で労働者の占める割合は他のどの階層のそれよりも小さい。このような「通説」に対して、ファルターらの選挙統計学的分析は、新中間層のナチズムへの特別な傾斜は認められないとし、これまで考えられてきたよりも職員層はより少なく、労働者はより多くナチ党に投票したのであり、従って労働者も職員もこの点では大差なく、両階層とも、1933年までにその1/4以上がナチ党の選挙人となっていたと推測した。因みに、同推計によると、1933年3月選挙における各階層毎の有権者に占めるナチ党投票者の比率(%)は、労働者=33、職員・官吏=28、自営者(含家族従業員)=47、年金生活者等=53、主婦=37。なお、この時のナチ党の得票率は、39%だった。以上については、Falter u. Hänisch, *a.a.O.*, S. 181ff., 214, を参照。

うな洞察からガイガーが到達した実践的結論は、既に見たように、狭義のプロレタリアートの階級政党である社会民主党の政策的転換である。理性的な政策によって旧中間身分の保護と建て直しをはかり、それによって小市民層の破局的政治への突入を阻止すること、効果的な社会政策と失業対策によって新中間身分を自らの陣営に獲得すること、こうし

-
- 12) 例えば、レンガーは、ガイガー論文の最終行「中間諸身分のもつ時代遅れの、また場違いのイデオロギーは、雲散霧消するだろう。そして、それと共に、このイデオロギー的混乱の政治的受益者のグループは、再び仲間内の騒々しい秘密集会にすぎなくなるだろう」という言明をとらえて、次のように述べている。このように「ガイガーは確信に満ちて予言した」、しかし、「彼の予測は、ほんの束の間の後に (nur zu bald) 誤りであることが証明された」、と。レンガーは、ガイガーがその「的確な分析」(レンガー) から引き出した政策的・実践的結論——それを本稿は強調した——を全く紹介も考慮もしていない。しかし、ガイガーの予測はそのような政策的実践を前提にするものである以上、レンガーの議論はガイガーに対して公平を欠いたものと言わざるをえない。レンガーが言う「ほんの束の間」、1930年から33年の間に、ガイガーが提言したような経済的・社会的政策を可能にし、ナチス体制へと向かう歴史の流れを共和国へと転轍するような「余地」は、当時のドイツ社会には全く存在していなかったのであろうか。この点の吟味が正確になされない限り、レンガーのガイガー評価は、「後知恵の決定論」という批判を免れえないように思われる。Lenger, *a.a.O.*, S. 177f. ところで、1930年3月に始まるブリューニング内閣の時代にいかなる政策的選択肢が可能性として存在していたかをめぐっては、社会史家W. コンツェの議論に始まり最近では経済史家K. ボルヒャルトの問題提起に至る、現在なお継続中の長い論争史が存在する。E. Kolb, *Die Weimarer Republik*, 2. Aufl., München 1988, S. 199ff., を参照。ワイマール共和国の解体過程をめぐる今日の2大重要テーマは、コルプによれば、ナチズムの社会的基盤の問題とこの政策的選択肢に関する問題であるが、ガイガーの中間身分論は、本稿が明らかにしたように、これら2大テーマを結びつけるひとつの重要な観点が存在していることを示唆している。ナチズムの「中間層テーゼ」が戦後日本社会において有した実践的意義については、松田智雄「ナチス抬頭の理解のために——ワイマール共和国の崩壊」(同『新編「近代」の史的構造論』新泉社, 1971年, 所収), 大塚久雄・上山春平「危機の診断——〈ネイション〉を捉えるものは誰か——」(『大塚久雄著作集』第6巻, 岩波書店, 1969年, 所収), を参照。

たガイガーの提言は、事実上、狭義のプロレタリアートの階級政党から社会民主党が脱皮することを強力に要請するものであった。それは、ドイツの議会制民主主義の歴史において1930年9月選挙が有する画期的意義を踏まえて、この選挙において「国民の信頼を勝ち取ることができなかった」議会主義政党が今後取るべき方向として提出されたのである¹²⁾。

かかる提言は、しかし、社会民主党を動かすには至らなかった。1929年恐慌に続く大不況とブリューニング内閣のデフレーション政策によって不況が深刻化し失業者が急増していく状況の中で、1932年夏、左派系の自由労働組合の代表は、社会民主党の国会議員に対して、彼等の雇用創出計画への同意を重ねて求めた。その際に、当時の社会民主党の指導的理論家R. ヒルファーディング (Hilferding) は、これを拒否して次のように述べた。「不況は資本主義に内在したものである。それ故に、資本主義体制はこのような危機を自分自身で克服しなければならないし、それができない場合にはそこで崩壊しなければならない」と¹³⁾。このような観点に立って古典的な階級政党の原則を維持しブリューニング内閣の財政緊縮措置に対して「寛容政策」をとった社会民主党によっては、パニック化した諸階層を共和国のもとにふみとどまらせようとする「理性的な政策」、「効果的な社会政策と失業対策」は、遂に採用されえなかつ

13) G. Bombach u.a. (Hg.), *Der Keynesianismus III. Die geld- und beschäftigungstheoretische Diskussion in Deutschland zur Zeit von Keynes*, Berlin u.a. 1981, S. 385. また、大野英二「ヒルファーディングとシュトラッサー」『経済論叢』(京大)第105巻、第1・2・3号、1970年、をも参照。SPDの反対に直面して、ADGB指導部も、組合の雇用創出計画(WTBプラン)への支持を表立っては差し控えた。W. Zollitsch, *Einzelgewerkschaften und Arbeitsbeschaffung: Zum Handlungsspielraum der Arbeiterbewegung in der Spätphase der Weimarer Republik*, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 8. Jg., Heft 1, 1982, S. 104.

たのである¹⁴⁾。

現代ドイツの代表的な社会史家のひとり、H.A. ヴィンクラーは、「(ワイマール期に) 社会民主党の『国民政党』への突破がなされていたならば、それはナチ党の抬頭を著しく困難にしていたのではないか」と述べ、都市と農村の勤労的国民全般の党たることを目指した1921年のゲルリッツ綱領が僅か4年後には放棄され、社会民主党が階級政党の伝統に立ち戻ってしまったことを惜しんだ¹⁵⁾。彼によれば、「議会主義の論理をまっ先に把握し、その宣伝を通じて『国民政党』になることをひたすら志向したのは、議会主義勢力ではなく、反議会主義勢力——初めは国家人民党であり、次はナチス——であった」¹⁶⁾。「逆説的に響くが、議会主義体制の論理を議会主義政党よりもっとうまくとらえたのは、極端に反議会主義的なナチスだった」¹⁷⁾。

しかしゲルリッツ綱領以降も、社会民主主義陣営の中では、労働組合を中心に陣営の政策転換をめざす試みが——最終的には挫折したとしても——継続していたものと思われる。そして、今日、ナチズムの「中間

-
- 14) H.A. Winkler, Choosing the Lesser Evil: The German Social Democrats and the Fail of the Weimar Republic, in: *Journal of Contemporary History*, Vol. 25, Number 2-3, 1990, p. 220f. 1930年10月以降の社民党のブリューニング内閣に対する「寛容政策」については、次の詳細な分析を参照, E. Mattias, Die sozialdemokratische Partei Deutschlands, in: Ders. u.a. (Hg.), *Das Ende der Parteien 1933*, Düsseldorf 1960. (E. マティアス, 安・山田訳『なぜヒットラーを阻止できなかったか——社会民主党の政治行動とイデオロギー』岩波書店, 1984年, 所収)
- 15) Winkler, Klassenbewegung oder Volkspartei? Zur Programmdiskussion in der Weimarer Sozialdemokratie 1920-1925, in: *Geschichte und Gesellschaft*, 8. Jg., Heft 1, 1982, S. 9ff.; Ders., *Mittelstand, Demokratie und Nationalsozialismus*, Köln 1972, S. 125.
- 16) ヴィンクラー「復古の幻想」, 47頁。
- 17) Winkler, *Mittelstandsbewegung oder Volkspartei?* S. 101.

層テーゼ」の古典的文献とされるガイガーの議論は、1930年の時点においては、社会民主党に対して古典的な階級政党からの転換を説く実践的提言に他ならなかったと評価しうるのではないか。